令和七年度入学者選抜学力検査問題

（前期日程）

国　語

（注　意）

1　問題紙は指示があるまで開いてはいけません。

2　問題紙は本文一二ページです。答案用紙は三枚あります。

3　答えはすべて答案用紙の指定のところに記入しなさい。

4　字数制限のある解答欄への記入に際しては、句読点を一字と数えなさい。

5　問題紙と下書き用紙は持ち帰ってください。

一　次の文章は、カール・ポパーの講演「イマヌエル・カント　啓蒙の哲学者」（一九五四年）の一部です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

カントの没後一五〇年が流れ去りました。かれは、プロイセンの地方都市ケーニヒスベルク(注)で亡くなりましたが、八〇年の生涯をその地で過ごしたのでした。かれは何年も完全な隠遁生活を送っていたので、友人たちは葬儀は簡素にしようと考えていました。ところが、この貧しい職人の息子は、まるで王のように葬られたのです。かれの死の知らせが広まると、人びとはかれの家に群をなして集まってきました。人びとの来訪は、何日もつづきました。葬儀の当日には、ケーニヒスベルクのすべての往来は止まってしまいました。街中の鐘という鐘が鳴り響くなか、かれの棺には見渡すことのできないほどの行列がつづきました。当時のケーニヒスベルクの住人は、このような葬列は、いまだかつてなかったと伝えています。

人びとのこのような驚くべき自発的行動は、いったいなにを意味していたのでしょうか。偉大な哲学者であり、よき人であったという名声がカントにあったというだけでは、十分な説明になりません。わたくしには、この出来事は深い意味をもっていたように思われます。わたくしは、当時、すなわち、絶対君主フリードリヒ・ヴィルヘルム三世の統治下の一八〇四年、カントのための晩鐘は、アメリカとフランス革命の余韻、すなわち一七七六年と一七八九年の理念の余韻であったと、あえて推測します。カントは、同胞にとってはそうした理念のひとつの象徴であったのであり、人びとは、人間の権利、法のもとでの平等、世界市民、知による自己解放、そしておそらくさらに重要な地上における永遠の平和を説き、宣言したカントに感謝するために葬儀に集まったのです。

そうした理念すべての萌芽は、イギリスからヨーロッパ大陸へと伝えられました。しかも、一七三三年に出版されたヴォルテールの『イギリスについてのロンドンからの手紙』という一冊の本によって伝えられたのです。この本のなかでヴォルテールは、大陸の絶対君主制に対してイギリスの立憲制的統治形態を対置しました。そして、イギリスの宗教上の寛容とローマ教会の不寛

容、アイザック・ニュートンの宇宙体系やジョン・ロックの分析的な経験論のもつ解明力とルネ・デカルトの独断論とを比較しました。

ヴォルテールの本は焼かれました。しかしその出版は、A世界史的な意味をもった哲学的運動の発端でした。この運動には独特な攻撃的雰囲気がありましたが、それはイギリスではほとんど理解されませんでした。というのも、それは、この国の状況にふさわしいものではなかったからです。

この運動は、ふつうフランス語では éclaircissement と、そしてドイツ語では Aufklärung と呼ばれています。ほとんどすべての近代の哲学的、政治的運動は、直接的にせよ間接的にせよ、ここにまでさかのぼることができます。なぜなら、それらは、直接、啓蒙から生じたか、あるいは、ロマン主義者が好んで、にせ啓蒙(Aufklärerei)とか、えせ啓蒙(Aufkläricht)と呼ぶ啓蒙に対するロマン主義的反動から生じているからです。

カントが亡くなってから六年後、もともとはイギリスに由来するこの理念は、イギリス人によって〈うわべだけの傲慢な知性主義〉と考えられるようになりました。そして Aufklärung (éclaircissement)ということばを英語に翻訳するために、当時はじめて使われた enlightenment ということばには、こんにちでさえイギリスでは、上っ面で傲慢な、にせ啓蒙というニュアンスがまとわりついています。

カントは啓蒙を信じました。かれは、その最後の偉大な擁護者でした。わたくしは、こんにち、このような見方が一般的ではないことをよく知っているつもりです。わたくしがカントを啓蒙の最後の擁護者と見ているのに対し、しばしば、かれは啓蒙を否定したかの学派――ロマン主義的な〈ドイツ観念論〉の学派――つまり、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルの学派の創設者と見なされているのです。わたくしの見るところ、これら二つの見方は、決して統一されるものではありません。

フィヒテ、そしてのちにはヘーゲルも、カントの名声を自分たちのために利用しました。かれらは、カントを自分たちの学派の創設者であると公言したのです。しかしカントは長生きしたので、カントの後継者であり、跡継ぎであると称するフィヒテが

くりかえしおこなったこびへつらいのこころみを拒否できました。まったくといっていいほど知られていないのですが、『フィヒテの学問論にかんする宣言』(一七九九年八月七日)という出版物のなかで、カントはつぎのように書いたほどです。「神よ、われらを友から守りたまえ……。ときとして欺瞞(まん)をなし、(1)サクボウを企て、われわれの没落をもくろんでいるにもかかわらず、好意的なことばを使う、いわゆる友なる者から。そうした者やかれらの仕掛けるわなに対しては、どんなに警戒しても十分過ぎるということはないのだから。」しかし、カントが亡くなって、もはや自分を守ることができなくなると、この世界市民は、国家主義的でロマン主義的な学派の目的に利用されてしまいました。しかも、かれがロマン主義の精神や感傷的な熱狂主義とか狂信に対して述べたり書いたりしたあらゆることにもかかわらず、うまく利用されてしまったのです。

ところで、カント自身が啓蒙の理念について語ったことを聞いてみましょう。かれはつぎのように述べたのです。「啓蒙とは、人間がみずから責めを負うべき未成年の状態からぬけ出ることである。未成年とは、他の人の指導がなければ自分の知力を使用できない無能力のことである。こうした未成年状態の原因が知力の欠乏にあるのではなく、他の人の指導なしに知力を使用する決定と勇気の欠乏にあるならば、未成年の状態はみずから責めを負うべきものである。したがってSapere aude! つまり、汝自身の知力を使用する勇気をもて、というのが啓蒙の標語である。」〔『啓蒙とはなにか』、一七八四年〕

カントがここで語っていることは、あきらかに個人的な告白であり、自分自身の歩みの要約です。かれは貧しい境遇で、視野の狭いピエティズム〔敬虔(けん)主義〕の環境で育ちました。しかし、かれは勇敢にも知識によってみずからを解放する道を歩んだのでした。後年、かれはときおり〈子供時分の隷従〉を、つまり、自分が精神的に未成熟であった時代を恐ろしげに回顧していました。ですから、精神の自己解放という理念がかれの全生涯をみちびく星であったと、そしてまた、この理念を実現させ広めるための戦いがかれの生涯を満たしていたと言ってもよいでしょう。

〔中略〕

倫理学の領域におけるカントのコペルニクス的転回は、自律についてのかれの理論に含まれています。そこでかれは、われわ

れは権威の命令には決して盲目的にしたがってはならない、われわれは、超人間的な権威を道徳の立法者として、それに盲目的に服従することがあってはならない、と述べています。権威のくだす命令に直面したときに、自分自身の責任のもとでそれがはたして道徳にかなっているか否かを決定するのはいつでもわれわれ自身なのです。権威は、われわれが抵抗できないほどに、その命令をカンテツ(2)させる権力を所有しているかもしれません。それでも、自分たちの行動を自分たちで選ぶことが可能であるときには、責任はわれわれ自身にあるのです。なぜなら、決定するのはわれわれだからです。われわれは、命令にしたがうこともしたがわないこともできるのであり、権威を承認することも拒否することもできるからです。

〔中略〕

カントの倫理学は、人間の良心こそ人間にとっての唯一の権威であるという命題に限定されるわけではありません。かれは、良心がわれわれに要求しうるものを確立しようとしました。かれは、道徳律をいろいろと異なったかたちで表現しましたが、そのうちのひとつはこうです。「汝自身の人格にも、他のすべての人びとの人格にも存在する人間性を、いついかなるときにも同時に目的として用い、決してたんなる手段として用いてはならない。」〔『道徳形而上学の基礎づけ』第二版、一七八六年〕カント倫理学の精神は、おそらくつぎのことばで要約できるでしょう。あえて自由であれ、そして他のあらゆる人びとの自由を尊重し、これを守れ。

〔中略〕

カントの歴史上の位置についてもっとホウカツ(3)的な視野をえるために、過去にずっとさかのぼってみると、彼をソクラテスとくらべることができます。国家宗教をそこなったとか、青年を害したとかで、二人とも罪に問われました。二人ともみずからの潔白を主張し、思想の自由のために戦いました。自由とはかれらにとって、コウソク(4)がないということ以上のことを意味していました。かれらにとって自由とは、人生の唯一生きるにあたいする形態だったのです。ソクラテスの弁明と死は、自由な人間という理念をひとつの生きた現実としました。ソクラテスは、みずからの精神が屈服しなかったゆえに、自由でした。かれは、な

んぴともかれの精神を傷つけえないことを知っていたゆえに、自由でした。自由な人間というこのソクラテス的理念は、われわれ西洋の(5)イサンですが、カントは、倫理の領域とおなじく知識の領域においても、この理念に新たな意味を与えました。さらにかれは、この理念に、自由な人びとの社会――すべての人びとの社会――という理念をつけ加えたのでした。なぜなら、カントは、どんな人間でも自由であるのは、自由に生まれてくるからではなく、重荷――みずから自由に決定することに対しては責任をもつという重荷――を背負って生まれてくるからであると示したからです。

（カール・ポパー著、小河原誠訳『開かれた社会とその敵』第一巻（上）、岩波書店、二〇二三年、三五～五四ページ、一部改変の上、引用）

（注）　現在のロシア領カリーニングラード。

〔問一〕 傍線部(1)〜(5)の片仮名を漢字に直しなさい。

〔問二〕 傍線部A「世界史的な意味をもった哲学的運動」とあるが、なぜそういえるのか。本文に即して、五〇字以上、七〇字以内で述べなさい。

〔問三〕 傍線部B「こびへつらい」の意味として最も適切な四字熟語を次の中から一つ選び、番号を書きなさい。

① 曲学阿(あ)世
② 阿諛(あゆ)追従
③ 付和雷同
④ 換骨奪胎
⑤ 流言飛語

〔問四〕 傍線部C「カント自身が啓蒙の理念について語ったこと」の内容として正しいものを次の中から一つ選び、番号を書きなさい。

① 人間が未成年状態の責めをみずから負うべきなのは、他の人の指導なしに知力を使用する決定と勇気が欠乏しているからであって、知力それ自体が欠乏しているからではない。

② 未成年の状態は、それ自体がみずから責めを負うべき無能力なのではなく、他の人の指導のもとに自分の知力を使用する決定と勇気が欠乏して初めてそうなり得る。

③ 人間は、知力の欠乏の責めをみずから負うべき未成年状態を乗り越えるために、自分自身の知力を使用する勇気をもって精神の自己解放を成し遂げなければならない。

④ 未成年の人間は、たとえ貧しい境遇にあるとしても、知識によってみずからを解放する道を勇敢に歩むことによって視野の狭いピエティズムからぬけ出るべきである。

⑤ 未成年とは、人間がみずからの知力の欠乏の責めを他の人に負わせるような無能力のゆえに精神の自己解放を未だ成し遂げられずにいる隷従状態のことである。

〔問五〕 傍線部D「自律」とはどういうことか。本文に即して、六〇字以上、八〇字以内で述べなさい。

〔問六〕 傍線部E「すべての人びとの社会」とあるが、カントの理念において、それはどのような社会か。次の文の空欄に当てはまる適切な語句を記しなさい。

（　　ア　　）のみならず（　　イ　　）をも（　　ウ　　）する社会

二　次の文章は、本居宣長（もとおりのりなが）が大和国を見聞した旅の日記です。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、会話部分には、かぎ括弧を付していません。

いと大きなる礎ありて、塔なんどの跡と見ゆ。近きころ、この石をおのが庭に据ゑむ①とて、ある者の掘らせつれど、あまりに大きにて掘りかねて止みぬる、程もなく病み伏して死にけるは、このたたりにてありけりとなむいふなる。その前にかりそめなる庵（いほり）のある、主（あるじ）の法師にこの塔のこと尋ねしかば、宣化天皇の都の跡に寺建てられて、いみじき伽藍（がらん）のありつるが、焼けたりし跡なり。このあたりにその瓦ども、今も欠け残りて多くありと教ふるにつきて見れば、げにこの庵の前にも道のほとりにもすべて古瓦の欠けたる、数も知らず、土に混じりてあるを、一つ二つ拾ひ取りて見れば、いづれも布目なんどつきて、古代のものと見えたり。この庵は、やがてかの伽藍のなごりといへば、そも今は何寺と申すぞと問へば、A だうくわうじといふよし答ふ。文字はいかに書きはべるとまた問へば、この法師、かしら打ち振りて、なにがし、もの書かねば、その文字までは知りはべらずといふにぞ。B なほ問はまほしきことも、ゆかしささめつる心地して問はずなりぬ。わが住む寺の名の文字だに知らぬ法師も世にはあるものなりけり。むげにもの書かずとも、これば かりはしかしかと人に聞き置きても知りをれかし。さばかりのあはつけさには、いかでいにしへのことをしもほのぼの聞き置きて語りけむとをかし。後に、こと里人に聞けば、みちのひかりと書くよしなり。されどそれもいかがあらむ。知らずかし。おほかたこの日記よ、ただものの心も知らぬ里人なんどのいふを聞けるままに記せることし多ければ、語りひがめたることもありぬべし。また、聞きたがへたるふしなんどもあるべければ、ひがことどもも混じりたらむ②を後によくかむがへたださむ③ことも、もの憂く、うるさくて、さて置きつるを、後見む④人、C みだりなりと、なあやしみそ。これは必ずここにいふべきことにもあらねど、思ひ出でつるままになむ。

（本居宣長『菅笠（すががさ）日記』による）

（注）○宣化天皇―六世紀前半の天皇で、奈良県高市郡明日香村の辺りに都を置いたとされる。
○伽藍―寺院の建物

〔問一〕傍線部①～④のうち、一つだけ他と異なる用法を持つものはどれか、一つ選び、番号で答えなさい。

〔問二〕本文中に、会話における作者の発言が二箇所あります。出現順に抜き出し、それぞれの最初の四文字を答えなさい。

〔問三〕傍線部A「だうくわうじ」について、作者が知り得た漢字表記は何か、三文字で答えなさい。

〔問四〕傍線部B「なほ問はまほしきことも、ゆかしささめつる心地して問はずなりぬ」と作者が思ったのはどうしてか。その理由を七〇字以上、九〇字以内で説明しなさい。

〔問五〕傍線部C「みだりなりと、なあやしみそ」を、何について「あやしむ」のかを補った上で、現代語訳しなさい。

〔問六〕 作者が本文で述べる内容として最も適切なものはどれか、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　関係者であってもその歴史を正しく知っているわけではない。それゆえ、地元の他の人にも尋ねるなどして複数の聞き取りが必要となる。それでも正しく語ってくれるとは限らないので、その点に注意しなければならない。

イ　地元の人であってもその土地の事柄に関する見識が備わっているとは限らない。また、私が地元の人の話を正しく聞き取れなかったところもあるに違いない。それらを検証し、修正を施すことは面倒である。

ウ　地元の人自身がその土地の言い伝えに脚色を加えたり、伝承の過程で誤りが混じってしまうこともあるに違いない。旅を終えた後、私がそれらを調査し、修正することは不可能である。

エ　地元の人が語るからと言って、その土地の事柄をうのみにすることはできない。私は、彼らの話を忠実に聞き取り、それを記録してはいるが、そこに誤った情報が含まれることは避けがたい。

三　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい（設問の都合で訓点を省いたところがあります）。

世人之著述、不レ能レ無レ病。僕常好三人ノ譏二一弾スルヲ其文一、有二不レ善者一、応レ時改定。昔丁敬礼常作二小文一、使僕潤飾之。僕自以三才不レ過二若人一、辞不レ為也。敬礼謂レ僕、「卿何所二疑難一。文之佳悪、吾自得レ之。後世誰相下知定二吾文一者上邪。」吾常嘆二此達言一、以為二美談一。

昔尼父之文辞、a与レ人通流。至三於制二『春秋』一、游・夏之徒、乃不レ能レ措二一辞一。過レ此而言レ不レ病者、吾未之見也。b蓋有二南威之容一、乃可三以論二其淑媛一、有二龍泉之利一、乃可三以議二其断割一。

（曹植「与楊徳祖書」『文選』による）

（注）○曹植（一九二―二三二）――曹操の息子で、三国時代を代表する文人。
○病――欠点。
○僕――一人称。この場合、作者の曹植のこと。

○譏弾――そしって批判する。
○丁敬礼――丁翼(字は敬礼)のこと。曹植の友人。
○疑難――迷いためらう。
○尼父――孔子のこと。孔子の字の仲尼を用いた敬称。孔子は『春秋』『詩経』『礼記』などを編纂(さん)した。
○游・夏之徒――子游・子夏などの孔子の優秀な弟子たち。
○措――加える。
○過此――これ以外で。
○南威――春秋時代の晋の絶世の美女。
○龍泉――名剣の名。

〔問一〕 傍線部a「与」、傍線部b「蓋」について、必要に応じて送り仮名を含め、読み方を平仮名で答えなさい。

〔問二〕 傍線部A「使僕潤飾之」、B「吾未之見也」を訓読して平仮名で書きなさい。

〔問三〕 傍線部X「後世誰相知定吾文者邪」について、現代語訳しなさい。

〔問四〕 傍線部Y「蓋有南威之容、乃可以論其淑媛、有龍泉之利、乃可以議其断割」は、比喩を用いて「文」のことを述べようとしています。この比喩を通して、曹植が「文」とその議論について言いたいことを、五〇字以上、七〇字以内で答えなさい。

出典に関する補遺

令和 7 年度金沢大学一般選抜（前期日程）「国語」の入学試験問題で引用した文章の原著出典は，次のとおりです。

【大問.一（出典）】

(c) 2008 University of Klagenfurt, Karl Popper Archives with kind permission from the Karl Popper Copyright Office